

わけ
元気なものには理由がある！？
——現場からみた信者育成の実践と課題

2006年1月14日に大正大学において、当財団主催の公開シンポジウムが開催され、93名の参加者があった。

昨年度に開催されたシンポジウム「現代における宗教者の育成」では次世代の信仰の中心的な担い手（神職、僧侶、神父・牧師、教師、布教師など）の育成や信仰継承にしばり論議を行なったが、今回のシンポジウムでは、「現場」での一般信者の育成に焦点をあて、各教団においてどのようにして信者の活動意欲を高め、「元気な」現場をつくっているのかという点について、神道、仏教系新宗教である立正佼成会と真如苑、そしてキリスト教から発題された。今回のシンポジウムでは、新たな試みとして、映像を用いて現場での取り組みを紹介していただいた。

シンポジウムの概要は以下のとおりである。司会の薄井篤子氏（神田外語大学講師）が趣旨説明を行なった後、パネリストの発題となった。



千勝重利氏（千勝神社宮司）は、信者育成に最も効果があるものとして、埼玉県の上峰山で行なわれる「寒行」、木曾の御嶽山で行なわれる「夏行」をあげる。5泊6日の日程で、滝行、登拝、座行、そしてテーマを掲げたディスカッション等が行なわれる。これらを通して「己を見つめる」ことが重要視され、神主、禰宜の指導による信者の育成が図られる。近年はディスカッションの比重が高まっているとのことであり、修行の様子についてビデオで

の紹介がなされた。

阿部記代子氏（立正佼成会一宮教会長）は、婦人、壮年、青年の部活動を重視していると語る。青年幹部教育や教区の研修会場として一宮教会を使用してくれるよう名乗りをあげ、食事担当、接待、送迎などの役を各部の信者が分担して行ない、「お給仕」の仕方や心を学ばせる。また教会道場を修行場として位置づけ、当番修行に力を入れており、毎日支部当番2人がミニ説法を行ない、その後法座を行っている。そして、婦人、壮年、



青年の各部が他の部の行事の手伝いをし、それによって相互に協力しあう体制をつくり、青少年や壮年部が活性化したという。さらに、一食運動（一食を捧げる運動）、献血などのボランティア活動、一宮市の祭りへの青年部の参加、青梅での佼成会の練成会などについてスライド映像での紹介があった。

平島進史氏（真如苑青年会カルチャー&ボランティア部長）は、「青年インタビューと青年会の活動」と題するビデオで、入信動機等についての青年信者へのインタビュー、ハワイでの灯籠流しへの日本の青年信者の参加の様子、青年部弁論大会などを紹介した。さらに青年経親（すじおや）制度について言及し、青年信者の悩みを支え、経験や信仰に基づくアドバイスを行う青年経親が青年信者にとって果たす役割とともに、自らが青年経親となることによって、自分自身を変



えていくきっかけになり、彼ら自身が育成されることを示した。二代目三代目は信仰する意味を見出せないという悩みがあるが、信仰を理解する場、価値観を共有する場としての青年会の諸活動の役割は大きいと述べた。

福田誠氏（東京バイブルチャーチ主任牧師）は、1990年に設立された江戸川区にあるペンテコステ派の単立・独立教会である東京バイブルチャーチでは、「家庭の回復」という視点から、ひきこもり、いじめ、不登校などの問題を抱える子どもたちへの働きかけ、子育てに悩む若い夫婦のためのカウンセリングやセミナー、結婚カウンセリング等を開催し、地域の人々に教会を開放してきたという。また、2001年にはクリスチャンスクールを開校し、インターナショナル校としてクリスチャン子弟を中心にプレスクールから高等部までの児童生徒を受け入れ、「聖書の神の愛の価値観と創造論の見地にたって“心の教育”を行い、共通の信仰という基盤の上、教会・家庭・スクールが一体となって次世代を教育し、信仰を育てている」と述べ、その様子をビデオで紹介した。

これらが発題に対して、コメンテーターの弓山達也氏（大正大学助教授）、渡辺雅子（明治学院大学教授）から、報告に対してさまざまな質問があった。とくに「己を見つめる」ことを必要とされる宗教が、社会活動を信者育成の重要な要素としていることについての質問には、以下のような回答があった。千勝神社の千勝氏は、己を見つめることで神という大きな存在がわかり、共存共栄ということにつながり、さらには世界平和にまでつながると述べた。立正佼成会の阿部氏は、「まず人さま」という会長の指導に触れ、人のことを考えることができる人間づくり、菩薩行としての社会参加の必要性について言及した。真如苑の平島氏は青年の悩みは自己実現であり、壁にあたって悩んでいる青年にとって、人のためになっていくボランティアは活動の場を与えるものであり、青年会活動にとって必要であると答えた。東京バイブルチャーチの福田氏は、スクールは外にむけてのものではなく、信仰継承や信者の育成が目的であるが、問題を抱えている子どもたちとのかかわりによって地域社会とのつながりができ、スクールとして老人ホームでボランティアを行なっているとのことであった。また、家族をはじめとする人間関係や生活様式の変化がどのように活動に影響を与え、現場で育成の工夫がなされているのかという問いもあった。



議論は多岐にわたり、多くの質問が投げかけられ、それらを逐一紹介する紙幅をもたないが、報告と議論をとおして明らかになったのは、「元気な」現場で、信仰を深めるプロセスを支えているのは、身近な信者仲間の精神的支援であり、そして社会活動への参加や日常生活の中で教えを噛み砕いて理解していくというもので、これはある意味で新宗教においては今も昔も変わらない基本的要素であるといえよう。伝統宗教である神道の「行」においても、近年ディスカッションが重要性を増すようになるなど、聖職者からの指導のみならず、信者仲間の中での研鑽という要

議論は多岐にわたり、多くの質問が投げかけられ、それらを逐一紹介する紙幅をもたないが、報告と議論をとおして明らかになったのは、「元気な」現場で、信仰を深めるプロセスを支えているのは、身近な信者仲間の精神的支援であり、そして社会活動への参加や日常生活の中で教えを噛み砕いて理解していくというもので、これはある意味で新宗教においては今も昔も変わらない基本的要素であるといえよう。伝統宗教である神道の「行」においても、近年ディスカッションが重要性を増すようになるなど、聖職者からの指導のみならず、信者仲間の中での研鑽という要

素が大きな役割を占めるようになったことは注目される。

今回のパネリストは各々の宗教における指導的立場の方だったが、いずれも上意下達式の指導のあり方ではなく、信者同士が互いに研鑽し、支援しあう場をつくり、そして、さまざまな活動を推進するにあたって裏方のような働きを心がけておられる方であるという感想をもった。また、ボランティアなどの社会活動が盛んであることも注目されるが、こうした活動をとおして生の意味を実感し、またそれを教えにより意味づけるという様相がみられた。しかし、ある意味では教えを理解させるために、社会活動が必要となっている現代的状況をも感じさせるものであった。

今回のシンポジウムの特徴は映像をまじえて実態を報告していただいたことで、各宗教教団の活動の特徴を視覚的にも把握することができた。準備をしていただいたことに感謝の意を表したい。